

キリシタンと仏教徒の関係における「憎しみ」「恨み」という感情について — キリシタン大名 有馬義貞をめぐることから —*

神 田 道 隆**

On the feeling of "hatred" in the relationship between Christians(Kirishitan) and Buddhists:
Focusing on what happened to Christian daimyo Arima Yoshisada

Michitaka KANDA**

はじめに

日本にキリスト教が伝来したのは1549年にフランシスコ・ザビエルが来日した時とされる。その時から88年後、1637年の島原の乱から数年後には日本国内のキリスト教信仰は表向き消滅したとされている。潜伏キリシタンによる命がけの信仰を除けば19世紀までの二百数十年間、公にはキリスト教信仰者（以下、キリシタン）は日本に存在しないとされた¹。

ではなぜキリシタンが消滅するほど徹底的に弾圧され、忌み嫌われたのか。その大きな要因は豊臣政権とそれに続く徳川政権、つまり国家権力によるものである。しかしそれだけであろうか。本稿では国家による政策だけではなく、そこにキリシタンと仏教を信仰する人（以下、仏教徒²）による、人と人との関係にも弾圧へとつながる要因があったと仮定し検討・分析を加えていく。特に1570年代³、高来と呼ばれた現在の長崎県島原半島⁴の領主であった有馬義貞の晩年の状況を中心に、キリシタンと仏教徒のやり取りから人がもつ憎しみや恨みという感情に着目する。

憎しみや恨みという人の感情をはっきりと記録から見ることは難しい。当時のキリシタンや仏教徒が日記などに「〇〇という名のキリシタンを憎む」「あの寺の〇〇という仏僧は許すことができない」と書き記されていれば明確な資料となり得る。しかし出来事を記した記録は現存するが、人の感情まで記された文章は見当たらない。そこで本稿ではキリシタンが仏教徒に対して、また逆に仏教徒がキリシタンに対して行った事柄に注目し、そこから生まれたであろう人の感情を読み解き、仏教徒がどのように憎しみの感情を抱き、それがキリシタン弾圧へとつながっていったのかを推測していく。

資料について、1570年代以降、島原地域では寺や神社の多くが破壊されキリスト教会（以下、教会）へ改修されたこと、またそれに伴い多くの仏僧やその関係者がその地を離れていることなどもあり、この当時の仏教側の記録は少ない。そこで比較的、歴史的な出来事を多く記しているキリスト教宣教師、ルイス・フロイスによる『日本史』⁵を中心に分析する。ただ、この『日本史』はあくまで宣教師による報告書であり、史実を残す資料としての意味合いは少ない。これをもってフロイス自身がイエズス会からどのように評価されるのか、ということが常に念頭にあったはずである。つまり「自分はこれだけ神の宣教のために頑張りました」という意味合いが強い文章だと考えるべきである。そのため脚色や思い違いなどもあるということを注意しておかなければならない。

キリスト教という宗教はそもそも他の宗教を受け付けない。大航海時代には世界各地で、もともとその地域にあった宗教を「異教」、習慣を「異教的」とし、攻撃し排除した。16世紀の日本においては、キリスト教以外の宗教の指導的立場にある者（仏僧など）に対して、改宗するか死か、という選択肢しか与えなかった。久田松は「キリスト教布教のためには、日本の社会に定着している神仏信仰の根を引き抜き、日本寺院の靈魂をキリスト教に改宗させたい、この一念であった」⁶としてるが、確かにそのとおりであり、とくに現在の長崎県内では寺社仏閣が徹底的に破壊されている。

一方で日本の宗教では、「もともと八百万の神」と言っ、神が一つという概念がない。だから海外から渡来した神でも敵とはならず、神の一つとして受け入れた。カラから来た神もカラガミと言いい八百万の一つだし（韓神のことをさして）、

* Received October 11, 2024

** 鎮西学院大学 総合社会学部 多文化コミュニケーション学科 Faculty of Social Inclusion Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

キリスト教も天主（デウス）の神として八百万の一つとして受け入れた。それにも関わらずキリスト教は常に自分たちは正しいと考え、他宗教を受け入れる姿勢を一切見せず、神は一つしかないとして寺社仏閣を破壊した。」と長崎県大村市にある富松神社の禰宜の方は言う⁷。

フロイス自身も当然のこととして、当時のキリスト教の考えをもっており『日本史』の中で、仏教徒のことをたびたび「悪鬼」と呼んでいる。そういった宣教師たちが持つ、他宗教への考え方がキリシタンと仏教徒との数十年にわたる衝突につながっていったのではないかな。

キリスト教消滅に至る経緯⁸

徳川政権誕生以前の時代、豊臣政権時に発布された「吉利支丹伴天連追放令」⁹では個人のキリスト教信仰についての咎めはなく、その名の通り伴天連、つまりキリスト教の指導者的役割である司祭の追放を命じる。ザビエルの来日以来、それまでも日本各地でキリシタンに対しての迫害・弾圧はいくつも見られる。しかし国家権力によるものはこの時が初めてであった。ただ、この「吉利支丹伴天連追放令」には「伴天連儀日本之地ニハおかせられ間敷候間、今日より廿日之間二用意仕可歸國候」とあり、厳密にはキリシタンに対しての処罰や迫害を命じておらず、キリシタンの立場をある一程度理解したうえで、ある種の保護のもとに20日間の猶予をあたえ司祭たちの帰国を促している。もしかすると国際関係を気にしたのかもしれないが、それでもキリシタン側からすれば気

持ちの良いものではなかったはずである。

これを当時の人たちはどのように受け取ったのか。少なくとも樹立当初の徳川政権は、豊臣政権時に出されたこの法令を塗り替えるかのように、キリシタンに対して寛容であった。厳密には、徳川家康は豊臣政権時代すでにフランシスコ会士ヘスースに自らの領地である江戸での宣教活動を許可し、その見返りとしてフィリピン・メキシコとの貿易関係を築こうとしていた。それはキリスト教が生み出す利益に大きな魅力を感じていたからに他ならない。豊臣秀吉の死後¹⁰、家康はより大胆になり、キリスト教との関係をさらに深める。秀吉の死後わずか数カ月後、1598年末に家康はヘスースの推薦状を持参した商人を使者としてフィリピン総督のもとに遣わし、関東の領地内への貿易船の来航や造船技師・鋤山技師の派遣を要請している。翌年にヘスース自らもフィリピンに渡り、徳川政権樹立の年となる1601年に再び来日。6月、京都で家康と会い、京都に教会建設用地取得の許可を願い出る。家康は京都ではなく伏見に用地を与える旨の約束をしている¹¹。

また、それと同じ時期に家康はイエズス会とも接近する。秀吉の死の翌年1599年5月に「伴天連追放令」撤廃の要請を受けるが、この時は「秀吉が発布した法令を破り天下の支配者になろうとしている」と批判されていることを理由に、その要請を退ける。余談ではあるが、豊臣政権下の五大老の一人である（一人にすぎないというべきか）徳川家康に対してイエズス会が法令の撤廃を要請していること、そしてそれを家康自身が退けてい

¹ 1657年大村郡崩れ（約400名処刑）、1790年浦上一番崩れ、1797年大村藩と五島藩による外海キリシタンの移住協定締結、1805年天草崩れ（約5200名摘発）などに見られるように潜伏キリシタンによる信仰は存在し続けていた。

² この当時は神仏習合の時代である。現代の宗教感覚からすれば寺院（仏教）と神社（神道）の境界は曖昧でどちらも同じ信仰の対象となっている場合が多い。たとえば大村の昊天宮（神道）は1574年、大村純忠によるキリシタン政策により社は焼き討ちにあうが、御神体は事前に阿金法印という仏僧によって佐賀嬉野に遷されている。この阿金法印は他にも大村領内の極楽寺本尊や八幡宮の御神体も運んでいる。

「…郡昊天宮極楽寺本尊毘沙門天、黒丸村の八幡宮其外諸社の神軀を奉負、同村の海邊柳津より乗船し、危難を避て遂に嬉野に隠遁す。（『大村郷村記 第二巻』（福重村・大日堂）pp.133～134）」。

また仏僧が現在の宮司が行う神道の行事を代役として行うことも日常的に行われていた。そのため仏教徒と神道信仰者の線引きは難しく、本稿ではそれらすべてをまとめて「仏教徒」とする。

³ 元龜～天正年間。

⁴ 当時「高来」と呼ばれた地域。

⁵ 中公文庫 松田毅一、川崎桃太 訳

⁶ 久田松（2010）、7頁。

⁷ 2023年11月4日大村市富松神社にて聞き取り。

⁸ 五野井、198～206頁。

⁹ 1587年7月24日（天正15年6月19日）発布。

¹⁰ 1598年9月18日。

¹¹ 五野井、189頁。同年9月、ヘスースは京都で病死。家康は伏見での教会用地の話を防ぐ反故している。

ること自体がすでに豊臣政権の危うさを示していたといえる。

1600年関ヶ原役の後、その勢力を固め実質的な天下人となった家康はイエズス会に対し、長崎・京都・大坂における居住を許可した特許状二通を宣教師にあたえた。さらに翌年、伏見に修院建設用地もあたえる。また同じころ、現長崎県のキリシタン大名であった有馬氏・大村氏に対し、その信仰を保証している。これらのことは当然ながら、通商貿易による利益に強い魅力を感じていたからに他ならない。これはキリシタン大名であった、有馬氏や大村氏もあるいは同じ目的であったのかもしれない。家康は「フランシスコ会の関東地方～フィリピン間貿易、イエズス会の長崎～マカオ間貿易の両航路を模索し、フランシスコ会側に進展が見られなかったため、イエズス会側の長崎～マカオ航路の確立を政権樹立と同時に進めた¹²。」しかしそれらはあくまでキリスト教が生み出す利益に大きな魅力があったからであり、家康に信仰的な行動は見られない。

ちなみに、1603年1月12日付、司教セルケイラによる報告書には、当時のキリシタンの状況が詳しく記録されている。信徒数30万人、教会数190、イエズス会所有のカーザとレジデンシア21、布教活動従事者900名（パードレ・イルマン126名、同宿284名、看坊170名以上、小者330名）¹³。江戸時代初頭の日本の人口はおよそ1200万人であったとされ¹⁴、そこから算出すると全人口の約2.5%がキリシタンであったこととなる。現在の日本の人口が約1億2千万人、そのうち約126万人¹⁵がキリスト教系宗教の信徒であるとされ、国民の約1%程度である。本稿が対象とする年代（1570年頃）から30年あまり後の時代ではあるが、江戸時代初期には現在の2倍以上のキリシタンがいたことになる。また当時は全国に均一してキリシタンが存在していたということは考えにくく、たとえば南蛮貿易を行っている港のある地域や、都市部といった、ある一定の地域¹⁶に集中して多く存在したはずである。そのため領民の多くがキ

リシタンという地域もあり、そのような地域での影響力、特に政治的なものは相当なものだったのではないかと推測される。

しかし日本におけるキリシタンの繁栄は長くは続かない。徳川政権はある時から完全な禁教政策をとるようになり、キリスト教消滅へと歩みだす。その大きな要因の1つが1609年から1612年の間に起きた「岡本大八事件」である。本稿でおもに取り扱う有馬義貞の子で、当時はキリシタンであった有馬晴信は、それまでの龍造寺氏との争いで生じた失地を回復し、肥前の大部分を有馬氏の領地にするということが悲願があった。そこに目をつけたのが、同じくキリシタンで本多正純の家臣 岡本大八である。彼は晴信に、失地の回復を主人 本多正純に働きかけると言い、さらに家康の朱印状まで偽造して多額の金銭を賄賂として受け取った。結果、それらは明るみになり、岡本大八とともに贈賄をした有馬晴信も逮捕された。

この事件は政権や、家康本人の気にも障ったようである。武士であったが岡本大八は駿府市中引き回しのうえ火刑。有馬晴信は甲斐（山梨）に流罪となり、その地で斬首¹⁷。有馬氏の領地は一時没収されるが、晴信の嫡男である直純が家康の近侍であり、さらに妻が家康の養女 国姫であったことなどが幸いし家督と所領の安堵が認められた。

そして徳川政権は岡本大八を処した同日、1612年4月21日（慶長17年3月21日）付で公的に幕府直轄地でのキリスト教の禁教令を発布した。このため多くのキリシタンが棄教を迫られるか、厳しい処分を受けることとなった。同日付という点に、キリシタンに対する徳川政権の強い意志が見られる。ここにそれまでであったキリシタンと仏教徒によるいざこざではない、キリシタンへの大迫害と、それに伴うキリスト教消滅に至る大きなきっかけが生まれることとなった。

高来を含む現在の長崎県下では、長崎奉行長谷川藤弘（佐兵衛）がかねてよりキリシタンによる他宗教信仰者（おもに仏教徒）に対しての迫害的な態度を目にしており、領内のキリシタン取り締

¹² 五野井,189～190頁。

¹³ 五野井,190頁。

¹⁴ (財)国土技術研究センター HP

<https://www.jice.or.jp/knowledge/japan/commentary05> (引用2024/9/9)

¹⁵ 文化庁によればキリスト教系の信徒数は126万2924人（2022年12月31日時点）。

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/shumu/index.html (引用2024/9/9)

¹⁶ 時代にもよるが現在の鹿児島県、長崎県、大分県、山口県、京都府等と考えられる。

¹⁷ キリシタンであるため切腹（自害）を拒んだ。

まりに積極的に取り組んでいく。

有馬義貞の人物像

16世紀、肥前国高来^{たかく}¹⁸と呼ばれた現在の長崎県島原半島一体を統治したのは有馬氏である。有馬氏の歴史は鎌倉時代にまでさかのぼり有馬庄に地頭職を与えられたところに端を発する。1552年、第11代当主 有馬晴純（仙巖）から家督を譲り受けたのが有馬義貞¹⁹である。この義貞についてフロイスは「肥前国高来の屋形」と呼ばれている、「日本の貴人たちのもとでは珍しく、大いに真理を愛好する君侯であり、性格は温厚で正義の味方であり、所業は完全で、家臣の間では極めて好かれ、寛大、寛容なことで愛され、歌、すなわち日本の詩歌に造詣が深く、優れた書道家であり、統治においては老練、慎重かつ賢明であった。そして彼は久しい以前から下^{しも}²⁰の地方におけるもっとも賢明な人々の一人であった仙巖の嫡出の長男であった。」²¹と賞賛する。フロイスが賞賛する人物は、その人が熱心なキリシタンかどうかであると言ってよい。さらにその人物がその地域において権力者であるということは同時に、その地において「異教徒」とされた仏教徒の多くが迫害・弾圧されたことも意味する。

有馬義貞は宣教師たちにとって賞賛すべき人物ではあったが、一般的にはそれほど評価は高くない。とくに父である晴純からは最終的には家督を剥奪されたほどである。1559～62年のわずか3年で、一武将に過ぎなかった龍造寺隆信が肥前国²²の東側を支配する。1563年、脅威を感じた有馬義貞（島原）は、実弟でもある大村純忠（大村）とともに龍造寺氏の領地（佐賀）に侵攻する²³。龍造寺隆信は千葉胤連（小城）と同盟を結び丹坂峠で迎え撃った。丹坂峠の戦いである。有馬・大村連合軍は数的有利であったにもかかわらず大敗し、これにより肥前国一国は事実上、龍造寺隆信の支配下となっていく。勢力が縮小し、その支配

力は高来地域のみとなり、父晴純はこの責任を取らせる形で義貞の家督を剥奪した。この時、義貞42歳。事実上の隠居をさせられた義貞が、よりキリシタンによる力、つまりスペイン・ポルトガルとの貿易による利益を欲するようになっていくというのは当然のことである。

肥前国高来におけるキリシタンと仏教徒の抗争のはじまり²⁴

高来にやって来た宣教師たちは、この地に暮らす人たち、特に支配者層を「高尚である」とし、この地域全体に対して「きわめて良好」な印象を持った。そのため宣教の拠点とすべく「高来の地に入る道がみつからぬものかと熱望」した。ただ、宣教の拠点と言っても日本に送られてくる宣教師の数には限りがある。そのため当初から日本宣教は司祭教育のための教育施設セミナリオを建設・運営し、そこで日本人司祭を育て、日本人による布教をめざした。高来はその計画を実行するにふさわしい地域とされたのである。しかし高来は「高尚である」がゆえに、当時は学問でもあった仏教の影響がとて強く「大きくて豪華な寺院がいくつかあって、そこへ大勢の名望ある仏僧たちが多数参集」していた。またその仏僧たちは「その地の主な収入を消費し、人々の間に権勢を保って」いた。さらに「高来の地は、城から三里距たって高く山が聳えている。その山には、いくつかの凹みがあって、そこから絶えず激しい勢いで種々の硫黄の熱湯が噴出している。この硫黄泉に近く、かの山の上には大いなる僧院があるが、そこには実に大勢の仏僧がおり、また同僧院はその肥前国全体で他に比べてはなはだ多額の収入を有している。ここは日本における最大、かつもっとも一般的な霊場の一つで、^{うんげん} 不断に巡礼が訪れている。これらの寺院には温泉という偶像が奉獻されおり、そのようなことからこの高来の地は日本中でなおいっそうの名声と評判を有する」地で

¹⁸ 肥前国高来は現在の長崎県の島原半島、諫早市のおおよそ半分、長崎市内の一部を合わせた地域を指す。現在の諫早市高来（たかぎ・たかき）ではない。

¹⁹ 有馬氏第12代当主。1521～77年。キリシタン大名。弟に大村領主 大村純忠（ドン・バルトロメウ）がいる。1552年に家督は継がれるが、1564年に領内の情勢や佐賀の龍造寺への対応などから、父晴純に追放され家督は息子の義純に移されている。

²⁰ 現在の長崎県やその周辺の地方のこと。

²¹ 『日本史10』,31頁。

²² 現在の佐賀県と長崎県（壱岐・対馬を除く）地域。

²³ この中には有馬家の一軍として諫早の西郷純堯が参加。

²⁴ 『日本史10』,33頁。

あった。つまり現在の雲仙岳周辺は仏教における聖地的機能を果たしていたのである。

そのためセミナリオを建設し司祭を育てる以前に、キリスト教の布教自体が難しかった。宣教師たちは義貞に「一つの小さな聖堂を建てること」を願い出て、当時「五十軒もしくは四十軒の人家がある村」であった有馬から三里²⁵の場所、早崎²⁶に聖堂を建てた。そこでは「数名の漁夫たちに洗礼を授けること」に成功し、それで満足するのが精一杯であった。

1562年、それまでキリスト教布教の拠点は平戸であったが横瀬浦²⁷へと移る。そして同じ年、早崎地区を含む口之津と呼ばれた小さな漁村が南蛮貿易港として開港する。口之津は有明海へ入る比較的小さな南蛮船の寄港地として海上交通の要所となった。領主、有馬義貞は南蛮との貿易による利益を見込んだにちがいない。このことを仏教側はどのようにとらえたのか。早崎の漁夫がキリシタンとなったことは決して面白くはなかったはずだが、人数からすれば大した出来事とは考えていなかったかもしれない。キリシタン側は小さい聖堂とはいえ拠点ができたと、そしてそれを領主が認めたということはキリスト教布教のとても大きな一歩であった。

翌1563年にはルイス・デ・アルメイダのもと250人の洗礼が授けられている。わずか1年で両者にとって間違いなく特別な出来事へと変わっていく。

有馬義貞の改宗²⁸

高来^{ひがしどの}の中心地であった有馬に東殿と呼ばれる人物がいた。この東殿は主人である有馬義貞から「大いに重んぜられ」る代官であった。また多くの仏僧たちとも深い姻戚関係にあった。この地の代官が仏僧たちと縁戚にあったということから、キリスト教が入ってくる以前、この地域ではいかに仏教が生活に密着しており、影響力を強くもっていたのかがよくうかがえる。「高来の地に入る

道がみつからぬものかと熱望」していた司祭ガスパル・コエリュ²⁹もやはりその影響力に気が付き、東殿こそがこの地におけるキリスト教布教の重要な役割をもっていると考えた。あるときコエリュは東殿が「いくぶん人並外れて食欲に支配されていることを知った」ため、「わずかばかりの銀子」で彼を買収し、それに成功した。これにより「仏僧たちが、何かキリシタンの改宗について嗅ぎつけて万一妨害しそうな時には、それをくじき遠ざけさせる」ことが出来るようになった。キリシタン側は最も強い敵となりうる存在を、最高の味方にした。このことはキリシタンにとって大きな変化となる。高来の中心地、領主のお膝元である有馬地域での布教活動がやりやすくなった。領主 有馬義貞が早崎に聖堂を建てる許可を出し、250人もの領民をキリシタンとし、代官である東殿はキリシタンが領国の中心地有馬で布教することに妨害する仏教徒をおさえることに成功した。仏教側からすれば不愉快極まりない出来事であっただろう。或いは、こうなると仏僧の中でもキリスト教に興味をもちキリシタンになろうとする者もあったのではないか。

久田松によれば、隣国である大村領（現長崎県大村市を中心とした地域）では「大村純忠による入信の強要、また社寺の破壊に伴い、自らの信仰を棄ててキリスト教に入信する僧侶もいた」³⁰。いずれにせよ、キリシタンの勢力が一気に拡大しつつあった。そしてついに領主 有馬義貞がキリシタンに改宗する。

1576年、すでにキリシタンとなっていた大村領主であり弟の大村純忠のもとにいたコエリュに有馬義貞から使者が派遣され、高来の口之津で話をしたいという旨が伝えられる。早崎の聖堂での活動から十数年、口之津はすでに布教の中心地となっていた。話をする場所が居城である有馬 日野江城ではないのは、仏僧などをふくめ、キリシタンに対して良い考えをもたない者もいる中、妨害や混乱をさけるための領主としての配慮だった

²⁵ 約12km。江戸時代の旅人は一日で十里（約40km）を移動したとされる。道路の整備状況により多少の違いはあるが、三里は半日もあれば十分に移動できると推測される。

²⁶ 現在も早崎という地名や漁港がある。長崎県南島原市口之津町乙の付近。ただ口之津港からこの早崎まではせいぜい4～6 km、つまり一里程度である。

²⁷ 現在の長崎県西海市。

²⁸ 『日本史10』,34頁。

²⁹ 1530～1590年。イエズス会司祭。下（長崎周辺地域）の地方長。1586年大阪城で豊臣秀吉に謁見を許され、日本での布教の正式な許可を得ている。

³⁰ 久田松（2010）,11頁。

のかもしれない。

有馬義貞の改宗にはいくつかの理由がある。フロイスは「デウスの教えに対して抱いていた良い知識と高い評価が、彼をキリシタンになるように促していた」とあくまでデウス、つまり神の力によるものであり、信仰的なところに要因があるとした。また「仏僧たちが虚偽の占いを行い、彼らは彼に戦で勝利を博すると約束していたが、彼は経験に基づいて明白にその反対の事態になろうと見てとり感じていたからであった」³¹ともしている。要するに義貞はこの時すでに仏僧が行う占いや意見は信用に値しないという考えをもっていたということをフロイスは報告書に記したのである。このことが仏教徒にとってどれほど恨みの種になったのかは容易に想像できる。キリスト教が入ってくる前までは、義貞も、またその父である晴純（仙巖）も、有馬氏は先祖代々なにかあれば仏僧に相談することを常とし、仏僧はそれに応じて仏教的思想から教えをとくとき、また時には占いを行い、この地で有馬一族を長きにわたって守ってきたのである。それを義貞は信じなくなった。意見を聞かなくなったことが義貞自身の心境の変化であったとしても、仏僧からすれば「キリシタンや宣教師の入れ知恵によるものである」と考えたに違いない。この屈辱は耐え難いものであっただろう。

有馬義貞の受洗と高来の状況

この頃の状況でとくに注目すべき点は、義貞と周辺地域との関係である。有馬氏は有明海を挟んで隣国の佐賀・龍造寺隆信の勢力が日ごとに強大になっていくことに悩まされていた。特に有馬氏にとって影響が大きかったのは、父晴純の代には服従していた隣地 諫早³²の西郷純堯が龍造寺側に寝返ったということである。その理由は、すでに述べた丹坂峠の戦いによる有馬氏の大敗によるところが大きいと考えられる。西郷純堯は自国諫早に戻る退路を確保することも難しいほど現在の佐賀県と長崎県の県境辺りで追い詰められ、平戸の松浦隆信からの支援でなんとか帰還することができた。彼は翌年1563年に有馬氏を離反する。戦

国の世にあっては当然の判断だったのかもしれない。

しかし有馬氏にとっては、有明海を挟んだ対岸の龍造寺氏の動きを警戒するだけでなく、陸続きの隣国 諫早・西郷氏の動きに対しても細心の注意を払い続けなければならなくなった。この西郷氏の裏切り行為は有馬領内の家来はもちろんだが、領民にも大きな動揺が広がったであろう。

こうした軍事圧力に対し義貞は宣教師たち、つまりスペイン・ポルトガルによる支援が不可欠であると考えた。その支援を得るには彼自身がキリシタンとなること、つまりそれは高来一帯がキリスト教の地域になることを意味した。そのことを仏僧にも語ったのかもしれない。だからこそ、キリシタン側がいう「虚偽」であるかは別として、仏僧は有馬氏の行く末を見るため占いを行い「占いでは戦に勝利すると出ているから安心せよ。キリシタンに改宗する必要はない。」と説いたのではないか。

1576年の枝の主日の日³³、義貞は口之津の教会で「代官の東殿、同行してきた約三十人の貴人たちとともに受洗」しキリシタンとなった。教名（洗礼名）はアンデレ（アンドレス）。漢字で「安天烈」と表記し、これは「日本の文字で、安々と天を奪い取る人という意味である」とフロイスはいう。「もっとも気に入った教名を選べるようにと幾つかの聖人名が提示され」たものの中から義貞が自ら選んだ³⁴。

この前年、織田信長は長年の宿敵であった武田家に長篠の戦い³⁵で勝利、さらには越前（福井県）の一向一揆を攻め天下統一に向け大きく動き出す。が、未だ戦国の動乱期である。この頃、越後（新潟県）辺りを中心に上杉氏、常陸（茨城県）に佐竹氏、関東には北条氏、中国地方には毛利氏など大勢力とされる戦国大名が生まれはじめ、小勢力は誰につくかによって一族の命運が大きく分かれた。

九州南部では、肥後（熊本県）の南側を拠点とする相良氏と日向（宮崎県）の伊東氏、そしてこの後数年で九州全域をほぼ支配下におさめる薩摩（鹿児島県）の島津氏が互いににらみ合い、一方、

³¹ 久田松（2010）,36頁。

³² 当時は伊佐早と表記。

³³ イースターの一週間前の日曜日（主日）。1576年4月15日（福田,105頁）。

³⁴ 『日本史10』,39頁。

³⁵ 1575年6月。

九州北部は多くの地域（大分県・福岡県・熊本北部・宮崎北部）を後にキリシタン大名となり、すでに南蛮貿易を行っていた大友宗麟³⁶が支配している。有馬氏は丹坂峠の戦いで大敗した3年後のことであり、龍造寺氏の支配下にあった。

このような時代背景の中「安々と天を奪い取る」という名前を自ら選んだドン・アンデレこと有馬義貞は、キリスト教の力、つまりはスペイン・ポルトガルとの貿易によって生み出される利益を相当に期待し、自分も天下を狙える可能性があるかもしれないという考えを少なからずもっていたのではないだろうか。実際、大友宗麟は貿易による利益を大いに利用し、わずか数年で九州北部の支配者となっている。

スペイン・ポルトガルとの貿易によって得られる軍事的利益をフロイスは記している。義貞の治世から時代が経ち、息子有馬晴信の代となった1584年3月、有馬と龍造寺との間でついに直接対決が起きる。薩摩から島津家久（中務）率いる3000人の援軍が有馬側に加わり、現在の島原市を主戦場として行われた沖田畷の戦いである。この時、有馬・島津連合軍は貿易によって得た大筒二門を使用している。有馬晴信や島津家久は「千人の兵を有しているよりもそれらはより効果的に役立った」と語っている³⁷。この大筒の戦闘における効果、そして貿易による利益が絶大なものであったことがうかがえる。

有馬義貞の死をめぐるキリシタンと仏教徒との衝突からみる恨み・憎しみ³⁸

受洗からわずか数カ月後、高来（島原）の領主であった有馬義貞は病のためその生涯を終えた。この死の間際、宣教師たちを中心にキリシタンと仏教徒は激しく衝突する。

「改宗の仕事が有馬領においていとも順調に発展していた」が、有馬義貞は「キリシタンになって八、九カ月と経っていないのに膿瘍を患い重体」となる。不治の徴候が出てきたため息子の有馬晴信（鎮純）が千々石から有馬の城に来ている。この晴信に対し仏僧たちは義貞がキリシタンとなり、仏僧たちを遠ざけ、仏像、（仏教の）礼拝、崇敬といった行事をやらなくなったため（神

道の）神や仏による罰が当たったと説いた。さらにキリシタンの教えから逃れること、キリシタンが領国に入らないようにすることも合わせて勧める。そのため晴信はその仏教徒の言うことを信じるようになった。フロイスは晴信が「彼らに説得され、目の前の出来事に驚愕のあまり、やすやすと彼らの言うことに従った」と記す。

これに対しキリシタン側は義貞の病がもう治らないこと、また「地獄の狼たちに囲まれた小羊がどんなに危険であり得るかが判ったので」、義貞を勇気づけようと日本人修道士を何度も送ったが仏教徒に阻まれて義貞のいる部屋に入ることができなかった。さらにポルトガル人の外科医を長崎から招いたが、彼を通してキリスト教への信仰を強めるように言うのではないかと仏教徒側から憂慮され、やはり会うことはできなかった。

この仏教徒の行動は「キリスト教を信仰していれば義貞は助かっていたかもしれないが、仏教徒が阻んだため亡くなった。」とキリシタン側が主張できる理由を結果的につくってしまったとも言える。かくして有馬義貞はキリシタン大名ドン・アンデレとして、多くの仏教徒の親族、一族郎党が見守る中1577年1月15日（天正4年12月27日）に56歳の生涯を終えた。

これらの一連の出来事からキリシタンと仏教徒、双方の恨みや憎しみがよく見える。フロイスは「仏僧たちはそうなることを少なからず願っていたのであるが、他方、息子の若殿（有馬晴信）には偽って、自分たちは神や仏に、父君の生命を長らえしめたまえとただひたすらに懇願し祈願するよう努めていたと語った」としている。つまり仏教徒たちはキリシタンとなった義貞が亡くなることを少なからず願っていたのだが、当時は仏教に好意的であった後継ぎの晴信には「父が死なないことを神仏に願っていたが残念だ」と告げていたということになる。これはあくまでフロイスが記したものである。脚色している可能性は高く、実際に仏教徒たちが義貞の死を「少なからず願っていた」のかはわからない。しかしそれが真実かどうかは別として、フロイスたちキリシタン側は憎しみを強め仏教徒側を「悪」にしようとしているのは事実である。

³⁶ 大友宗麟が洗礼を受けキリシタンとなるのは1578年であるが、それ以前よりスペイン・ポルトガルとの貿易を行っていた。

³⁷ 『日本史10』,285頁。

³⁸ 『日本史10』,52-54頁。

有馬義貞の葬儀に関する出来事³⁹

当時、仏教徒であった跡継の有馬晴信をはじめ、周囲の多くが仏教徒であったが、死の前年（9カ月前）に有馬義貞はキリシタンとなる。宣教師フランシスコ・カブラルは「その遺骸をいとも盛大にキリシタン宗門の儀式をもって葬る許可を賜りたい」という旨を「毅然とした態度」で晴信に連絡する。亡き有馬義貞はあくまでキリシタン大名ドン・アンデレであり、キリスト教式の葬儀をあげ、その魂を天国に送るべきであると考えた。しかし晴信は「父君は仏教徒としてなくなったのであるから、（仏教の）僧侶たちが葬儀を行うであろう」と返答した。この「父君は仏教徒としてなくなった」ということについて詳細は不明であるが、死の直前におそらく棄教を勧めたということは容易に想像できる。後に晴信はキリシタン大名ドン・プロタジオとなるが、この当時はキリシタンを特に嫌う仏教徒であった。そのため父を仏教式の葬儀で葬ると考えたのは当然のことではあるが、何よりも周囲が仏教徒であったためこのような返事をせざるを得なかったということもあっただろう。

この晴信の返信に、カブラルは「二つのことをお願い」とすると返信する。一つは義貞が生前にキリスト教式の葬儀、つまり「司祭によって埋葬される」ことを「よくない」と言っていたのであれば、その証明書を見せてほしいというものである。その理由として義貞の実弟であり（晴信の叔父）、すでにキリシタンとなっていた隣国の大村領主 大村純忠（洗礼名：ドン・バルトロメウ）が、晴信やその周辺にいる仏教徒たちのふるまいや義貞の葬儀が仏教式で行われることに対して「非常に憤激」しており、宣教師たちが説明しても納得しないためであるとしている。大村純忠が本当に葬儀のあり方に納得していなかったのかは不明である。しかし、いずれにせよこの返事の内容は「お願い」というよりも大村純忠の軍事力を背景にした、晴信や周囲の仏教徒への脅迫である。こういった点も仏教徒側にとっては憎しみの種になったのではないか。

そしてカブラルの返事のもう一つの「お願い」は、教会から当時海岸にあった十字架までキリシタンによる行列をおこなうことと、教会でも義貞

の葬儀をさせてほしいということである。

結果、晴信は大村純忠宛に書状を渡すこと、キリシタン行列を行うこと、そして教会での葬儀を許可し「伴天連がよいと思うようにそこで行うがよかろう」と返答する。実際にそのキリシタン行列を見た仏教徒、特に仏僧にとっては喜ばしいものではなく腹立たしいものであったに違いない。

これらのやり取りをカブラルと晴信が個人的に行うはずはない。カブラルはまわりの宣教師やキリシタンたちに、一方で晴信は一族の主要な人物や仏僧に相談したであろう。そのようにキリシタン側で仏教徒側の反応に対応する集団ができ、また仏教徒側でも同じような集団ができていくことで、それぞれがそれぞれの相手側を「悪」とし、相手側に負の感情を募らせていくということが起きていった。これはいつの時代、どここの場所でも人の常ではあるが、このような事柄が恨みや憎しみという感情を生み出し、それを大きくしていったことは間違いないだろう。

その恨みや憎しみが形となって表れたのが、晴信が大村純忠宛の書状とキリシタン行列と葬儀を許可したという返事をした後である。仏僧たちは「殿（晴信）の返答を聞くと、それに不満で、晴信をして、ただちに第二の、そして前に言ったのとは反対の伝言を司祭（カブラル）のところに送らせ」たとある。それはつまり証明書は不要、有馬の街路を歩いていく行列は認めない（有馬の領地でのキリシタンの行列は認めない）、葬儀については教会の中であれば行っても差し支えないというものである。そしてこの返事を送りつけた後に、義貞の葬儀を仏教式で行い遺体を焼いた。フロイスはこの争議の様子を「亡き殿のため、彼らの悪魔的な習わしに従った葬儀を催し、その異教の儀式による、あれこれの飾りつけとともに殿の遺骸を焼いた」と記す。「悪魔的な習わし」という書き方にフロイスの仏教徒に対するとても強い憎しみが見られる。

キリシタン行列での衝突⁴⁰

上記のように、有馬義貞の死はキリシタンと仏教徒の溝を大きく深めることになった。それは一触即発の事態にまで発展している。キリシタン側は、義貞のため「国主にふさわしい^{ひつぎ}柩」をつくらせ、教会内に「盾と武器を上方に吊るし」「最良

³⁹ 『日本史10』,55-56頁。

⁴⁰ 『日本史10』,56-57頁。

の^{どんす}緞子や絹衣」で装飾した。そして、仏僧たちが晴信の返事の後に出した返事で禁止したキリシタン行列を敢行する。「それにはおびたしい数のキリシタンが馳せ参じた」とあることから、有馬の人々の目を引くものであり当然、仏教徒側も気が付いたであろう。キリシタン側、特にリーダー的存在であるカブラルからすれば、義貞の後継者となる晴信が許可したのでキリシタン行列を行ったわけである。一方で仏教徒側からすれば晴信の返事のあとに、さらに送ったキリシタン行列を禁止する旨をしたためた返事の方が最新のもので、こちらを優先すべきであると考えたはずである。もはや両者の溝は埋まるはずがないところまできていたのではないか。現にフロイスは「その地は、仏僧たちがキリシタンに対して何らかの不当干渉に出るのでなかろうかと、全く興奮状態であった」と記している。ここで興味深いのは、フロイスが「不当干渉」という言葉を使用しているところである。富松神社の禰宜の方がおっしゃるように、キリシタン側は常に自分たちは「正当」であり、仏教徒側の行うことは「不当」、つまり正当な理由がないのである。ここにも両者の溝が見られる。

キリシタンの言うところの「不当干渉」を正当に防衛する目的として、キリシタンたちは「平素ならば手に蠟燭を持ち運ぶのが習わしであるのに、それに代わり、皆は自発的に、自宅から、銃を肩に火縄を腕に、大小両刀を腰に、さらに槍とか長刀とか弓を携え、矢がいっぱいの矢筒を持ってやって来たので、(中略)キリシタンが秩序整然と進んでいった点では、勇敢な兵士たちの一隊のようであった」。「手に蠟燭を持ち運ぶ」ことが習わしであったということから、キリシタン行列は夕方～夜半に行われるものであったようだが、武装したキリシタンの行列が闇夜に紛れて歩いているのは異様な光景であったろう。敵対していなくても関係者でなければ恐怖を感じる。ましてや敵対している仏教徒たち、とくに仏僧にはどのようにみえたであろうか。

有馬義貞の葬儀の後に起きた衝突⁴¹

有馬義貞の葬儀の後、カブラルは身の危険を感じたようで、「ただちにそこから(有馬)から口之津に」移っている。すると口之津では毎日彼のもとに信徒がやって来て、仏教徒が十字架を切り

倒したという旨の報告があった。この当時、有馬や口之津などを中心に領内に大きな十字架が建てられていた。それはキリシタンにとっては誇らしいものであったはずだが、キリシタンを憎しみ嫌う仏教徒からすれば気分が良いものではない。現に、義貞の死後は毎日のように切り倒されているが、毎日切り倒せるほどの数、十字架がその地域にあったというのは驚くべきことである。キリシタンたちはその行為を目の当たりにして「青ざめた顔で、恥ずかしくてならぬように頭と眼差しを伏せて歩」いていた、とある。一方で仏僧たちは「絶えず街路を練り歩き、大勢のキリシタンたちを罵倒し、別の人たちは彼らにさんざん畳し文句を浴びせた」。「別の人たち」とはキリシタンではない人たち、つまり仏教徒と考えて間違いない。

この時の一般のキリシタンの生活を考えてみたい。最大の庇護者であった領主 有馬義貞が亡くなったうえに、司祭たちは新たに領主となるであろう有馬晴信やその周りにいる仏僧たちと抗争中。それでも信仰を守っていこうとする生活の中で、信仰の支えであった大きな十字架が次々と切り倒される。さらに道を歩けば仏僧や仏教徒たちに罵倒され脅されるという異常事態に、命の危険を感じた者も多くいたはずである。そのため「大勢が棄教した」とある。異常事態の中、仲間たちが棄教するということもあり多くのキリシタンたちが仏教徒に対し恐怖し、その恐怖から、これまで以上の憎しみの感情が生まれたのは当然のことである。

棄教した者の多くが「ほんの数カ月前に洗礼を受けたばかり」で、「信仰がまだしっかりと根を下ろしていない新しく弱々しい人たち」であったとも記されている。

それは「受洗者の数が多かったから、当時は、教理を教わった人たちがどれほど十分にそれを理解しているかを吟味する時間的余裕がなかった」とフロイスは分析する。確かにそうであり、これは同時に短時間で急激にキリシタンが増加したことも示している。これは逆に考えれば仏教徒にとっては大きな恐怖であっただろう。仏教徒はそのような生活の中で、キリシタン領主が死亡し、さらに後継者は仏教徒であった。恐怖が解消され、形勢逆転のチャンスとばかりに、キリシタンへの弾圧が厳しいものになっていったということもまた、人の感情からすれば当然のことであった

⁴¹ 『日本史10』,57-59頁。

のかもしれない。

人は自分の状況が悪い時に受ける他者の嫌がらせなど攻撃的な態度に対し、心に深く刻まれ深い憎しみの感情をつくりだす。キリシタン、特に宣教師たちはその感情が増幅している。フロイスは晴信が「領国の統治を継承することになって後、貴人たちの幾人かは彼の感情を害さないようにと異教（仏教）に立ち返り始めた。そしてパールの神の前に膝を屈しない人々も多数残りはしたものの、一般の人たちも同じく異教に立ち返った」と言う。「パールの神」⁴²とは旧約聖書に登場する異教の神の代表的な存在である。それまでのキリシタンの領主（義貞）から、仏教徒であり、しかも義貞の死に際して起きた一連の出来事でキリシタンに対して強い不信感を持った晴信が領主となったため、多くのキリシタンたちが棄教し仏教徒となった。これをフロイスは「パールの神の前に膝を屈する」と最も憎むべき敵の神の名を使って表現する。仏（ブッタ）を紀元前の昔からキリスト教（聖書）で最も嫌われてきた偶像礼拝の異教の神「パールの神」と同じように扱うというところにフロイスの本音である、仏教徒へのとても強い憎しみや怒りが読み取れる。

この当時、「信仰心」が強いのか弱いのかという現代の宗教における核心の部分よりも、自分の親族や知人などの周囲の人が受洗しキリシタンになるので私もなったという人や、キリシタンにならなければ嫌な思いをさせられるというある種の恐怖があり、その恐怖をなくすためにキリシタンになった、という人も多くいたようである。時代背景的にもともとそうだったのかもしれないが、より個人の考えや信仰心はあまり重要とされない状況をつくりだした。もちろんそれと同じ理由でキリスト教を棄教し、仏教徒に戻った人もいたはずである。

おわりに

かくして、15世紀半ば戦国時代に来日したキリスト教は日本各地で迫害されつつも、その教理と、なによりも貿易による利益という魅力によって戦国大名をはじめ多くの人々に受け入れられ

た。そして地域によっては在来の宗教（おもに仏教）を信仰する人よりも多い信徒数となり、数の優位をもって在来の宗教を異教なものとして攻撃した。それにより人々の関係は引き裂かれ、多くの憎しみや恨みを生み出した。

かつて高来と呼ばれた島原半島では領主 有馬義貞の死に際し、キリシタンと仏教徒は争い、激しく憎しみあいとても強い恨みの感情が残っていく。この争いは次の領主 有馬晴信治世時代にも続く。こういったことは当時の日本各地で起き、宗教的な争いは、政治的なものとなり、結果、国家政権によるキリシタン大迫害を生み出し、最終的に人々の深い恨みの中で島原の乱という多くの人命を奪う出来事にまで発展していく。有馬義貞の死が1577年。島原の乱の発生は1637年。その間60年。有馬義貞の死を直接知っている者が、島原の乱に参加したということは考えにくい。しかし親から子へ、さらに子から孫へ憎しみや恨みの継承がなかったとは考えられない。憎しみや恨みは当事者以外にも継承される。親が子に、たとえば「あなたの親戚はキリシタンに殺されている。キリシタンは気をつけなければならない。」と言ったり、子が孫に「おばあさんは仏教徒にひどい目にあわされた。だから気を付けなさい。」というようなことを親からの大切な話として伝えるということはあり得る。それは現在のパレスチナ問題における繰り返しの悲劇に心を止めれば理解できる。何事においても人は憎しみや恨みといった感情をどこかで止めなければいけない。

参考文献

- ・ルイス・フロイス、松田毅一・川崎桃太 訳（2000）『完訳フロイス日本史⑩大村・竜造寺の戦いと有馬晴信の改宗―大村純忠・有馬晴信篇Ⅱ』中公文庫
- ・ルイス・フロイス、松田毅一・川崎桃太 訳（2000）『完訳フロイス日本史⑨島原・五島・天草・長崎布教の苦難』中公文庫
- ・五野井隆史（1990）『日本キリスト教史』吉川弘文館
- ・久田松和則（2010）「キリシタンによる仏教・

⁴² 新共同訳聖書では「バアル」と表記。メソポタミア地域や現在のイスラエル辺りで信仰され、聖書で禁止されている偶像礼拝を行うため異教の神の代表的な存在として扱われている。「列王記上」「民数記」「士師記」「ホセア書」など。「列王記」上18章では預言者エリヤが雨乞いの儀式で争い勝利。「士師記」ではギデオンがバアルの祭壇を破壊。崇高なバアルを意味する「バアルゼブブ」を、蠅のバアルという意味の「バアルセブブ」と呼び嘲笑するほど否定的に描かれる。

神道の迫害」『海路』第9号,pp.6-17.

- 久田松和則 (2002)『キリシタン伝来地の神社と信仰—肥後国大村領の場合—』富松神社再興四百年事業委員会
- 福田八郎 (2020)『信仰の耕作地 有馬キリシタン王国記』聖母の騎士社
- 藤野保 編 (1982)『大村郷村記 第二巻』国書刊行会
- 林田秀晴 (2001)『島原半島の神社を訪ねて』長崎出島文庫

